町医者だより

平成19年12月号

＜発行・お問合せ先＞
おおわだ内科呼吸器科
院長　大和田　明彦
市川市南八幡４－７－１３
ｼｬﾝﾎﾟｰﾙ本八幡２階
ＪＲ本八幡駅南口(シャポー改札口)
１分ミスタードーナツ並び
スーパーつるかめ（旧フレック）2階
電話０４７-３７９-６６６１

おおわだ
内　科
呼吸器科

COPDについて

COPDは慢性閉塞性肺疾患、すなわちchronic obstructive pulmonary diseaseの頭文字を並べたものです。喫煙者に多いので最近はタバコ病とも言われています。以前は肺気腫（はいきしゅ）と慢性気管支炎に分類されていたものが一つになりCOPDと呼ばれます。

COPDは好中球による気管支・肺胞・肺血管の慢性炎症

ちょっと難しい話なのですが、COPDはタバコや汚染された大気に含まれる刺激物質（近年ディーゼルガソリン車から排出されるPM10と呼ばれる10マイクロメーター以下の粒子が注目されています）を吸入することによって生じる気管とその末梢の酸素や二酸化炭素のガス交換を行っている肺胞（はいほう）の慢性炎症で、細菌感染症に伴う炎症と同様、好中球が主役の炎症です。この慢性の炎症によって細い気管支の炎症（気管支炎）と肺胞構造の破壊が進み気流制限を生じます。気流制限とは、気管の内腔が息を吐くときにつぶれて空気の流れが妨げられること指します。また、COPDは気道や肺胞以外に肺の血管の炎症を引き起こすことが以前から指摘されてきました。

診断は喫煙歴と呼吸機能検査（スパイロメトリー）で行います

COPDは50歳以上の喫煙者に認める疾患です。喫煙歴があることが大事な所見です。
先に述べた気流制限は呼吸機能検査（スパイロメトリー）で診断します。1秒量、すなわち1秒間にはく息の量を努力性肺活量（思いっきり息を吸う量と思いっきり息をはく量の和）で割ったものを一秒率と呼びますが、これが０．７未満であれば気流制限があると診断します。先ほども述べましたが気流制限とは、息をはくときに気道内腔が狭くなるので、閉塞性呼吸障害とも呼ばれます。冒頭でお示ししたようにCOPDは“閉塞性”という日本語訳がついていましたが、閉塞性とは気流制限を意味しているのです。

喘息でも気流制限が見られます

気流制限という言葉を喘息の説明で聞いたことがあるかもしれません（町医者だより19年5月号の喘息の吸入療法について）。気流制限や閉塞性呼吸障害は、実はCOPDだけではなく喘息にも当てはまります。今から20年以上前にはCOPD(慢性閉塞性肺疾患）に、肺気腫、慢性気管支炎のほかに喘息も入っていたほどです。しかし、喘息をCOPDの中に一緒に入れておくには不都合な点が出てきました。例えば喘息で見られる気流制限は、元に戻り可逆性がありますが、COPDでは、元に戻りにくいです。喘息の年齢分布は小児から成人にまで幅広く認められますし喫煙の有無は関係ありません。なにより一番大きく異なる点は、喘息は好酸球というアレルギー細胞を主体とする気道の慢性炎症だと言う点で、喘息をCOPDとは別の独立した疾患と考えるようになりました。

COPDでは肺以外の症状が認められることが分かってきました

ここ1-2年、COPDには全身の炎症を伴うのではないかと指摘されようになってきました。20%近い左心不全の合併は肺以外の血管の炎症の存在を示唆しており、またうつ病、栄養障害や大腿四頭筋や末梢の筋力低下、貧血の合併などが明らかになっており、COPDが慢性全身炎症症候群のひとつの表現形ではないかとの議論が続いています。